

## インドの 綿花栽培の変化

**デカン高原の綿花栽培** 「デカン高原では綿花栽培が盛んである。」呪文のように唱えられてきたこのフレーズはインドの綿花栽培の現状を端的

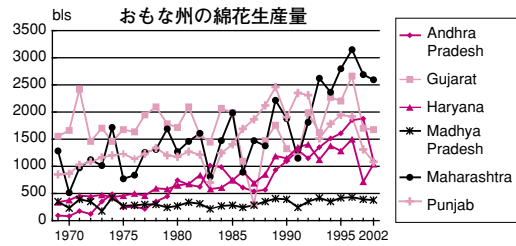
に表したもので、デカンの農業の現状を端的に表したものでない。

確かに現在でも、デカンの綿花地帯を構成するマハーラシュトラ州（以下MHA）やマッディヤプラデシュ州（以下MP）を中心とした地域がインドの作付面積の5割を占めていることは事実である。しかしこの地域が全国生産量に占める割合は約3割に過ぎない。デカンの綿作地帯はインド最大の作付面積を擁しながら、生産性は主要綿花生産州で最低という水準を脱しないままにしているのである。

**インドの綿花栽培** 黒色綿花土壌とも呼ばれるデカンのレグール土との関連もあって、デカンと綿花はいわゆる「環境条件をいかした農業」という文脈で教え続けられてきたのかもしれない。しかし、独立以来、インドの綿花生産の主力を担ったのは、デカンにグジャラート州とパンジャブ州を加えた地域であり、決してデカンが唯一の綿作地域ではなかった。

事実、生産量の首位は70年代から80年代にかけてはグジャラート州、80年代後半からはパンジャブ州であった。また、アンドラプラデシュ州やハリヤーナ州が90年代に入って急速に生産量を伸ばしていることも特徴的である。2000年に前後してMHA州が作付面積の広さを背景に首位となる。しかし、生産性は高いわけではない。たとえば、02年度のMHA州のそれは158kg/haで、パンジャブ州の410kg/ha、新興のハリヤーナ州の340kg/ha、アンドラプラデシュ州の230kg/haと比較して大きな差が開いたままである。

**デカン高原の農業** デカンでは、綿花だけではなく、多様な農業が展開されており、とくに近年の変化にはインドの農産物需給にも大きな影響を与える動きを見て取ることができる。第1はMHA州におけるトウモロコシ生産の急速な拡大で、02年度には全国生産の約7%を占めるに至っている。元来同州ではトウモロコ



注 bls=約170kg たとえば、1969年=1969年3月～1970年2月と読みとって下さい。  
出典：CMIE (Center for Monitoring Indian Economy Pvt. Ltd.) 農業統計

シ生産は限定的で70年当時は全国生産の1%に満たなかったものが、90年代以降急速に拡大して、主要生産州の一角を占めるに至った。この間、生産量は14万t（90年）、34万t（95年）と増加し、02年には74万tに達している。綿花とは異なり生産性もこの間に向上し、上位生産州に肉薄している。州内の主要生産地はアウランガーバード、ドゥーレなどのほか、かつては綿花の一大集散地として知られたショラールプルも有数のトウモロコシ産地となっている。

また、大豆生産の拡大も急で、70年にわずか1万t余だった生産量は、80年に44万t、90年に260万t、02年には456万tに達し、インドは世界第5位の生産国に進出し、輸出量も急増している。その中枢がデカンで、02年のMP州の全国シェアは56.6%、MHA州が34.7%で、この2州で全国生産の9割を占める。かつて綿工業都市として知られたインドールは大豆生産、加工業の一大拠点となっている。

さらに注目されるのが、生鮮野菜生産である。穀物生産を対象とした「緑の革命」やミルク生産にかかわる「白い革命」に次ぐ農業政策として、インドは目下園芸農作物を対象とした「黄金色の革命（ゴールデンレボリューション）」を進めている。そうした中でMHA州は全国的なタマネギ、トマトの生産州と位置づけられ、とくにナーシクはインドの主要都市に向けてトマトを長距離出荷する拠点として成長しつつある。

このようにインドでは新興の綿花栽培地域が台頭するとともに、デカンの農業も、綿花だけではなく、トウモロコシ、大豆あるいはトマトなどの一大生産拠点として新たな展開を迎えている。

(山口大学教育学部助教授 荒木一視)